

## サーサーン朝ガラスの基礎的研究 —博物館資料と遺跡出土資料—

四角隆二

岡山市立オリエント美術館 副主査学芸員

### 緒言

正倉院蔵白瑠璃碗で知られるサーサーン・ガラスは「サーサーン朝（226～651年）の版図で製作されたガラス」であるが、その定義はそれほど明確なものではない。そもそもサーサーン・ガラスは器形や装飾など製作技法の点で東地中海周辺地域のガラス（＝ローマ・ガラス）から強い影響（あるいは技術移転）を受けていることから、視覚的特徴だけでサーサーン・ガラスといわゆるローマ・ガラスを区別することが困難な場合がある。

さらに考古学研究上の問題として、伝イラン出土「博物館資料」とメソポタミアの「遺跡出土資料」の齟齬の問題が横たわる。前者は1960～70年代に古物市場を介して世界各地の博物館に収蔵された、いわゆる盗掘品でカスピ海南岸の古墓由来とされる。展示室を飾る華麗なカットが施された厚手の碗形や鉢形の容器が多く知られているが、これらは出土遺跡や層位、供伴遺物などの情報を失っているため「美術品」以上の扱いは難しい。後者は19世紀半ばから20世紀前半にかけて行われた欧米隊の調査によって得られた破片資料で、瓶形や壺形の容器が主体をなす。大英博物館や大学など限られた機関にのみ所蔵された資料は、調査年代が古く、本報告が出版されないまま今日に至っている。

上述のように実態が不明確であるにも関わらず、シルクロード愛好と正倉院蔵白瑠璃碗の強烈なイメージが増幅された結果、「サーサーン朝ガラスはシルクロード交易のヒット商品としてユーラシア各地へ運ばれた」「正倉院蔵白瑠璃碗にみられるような厚手の切子ガラス碗はラクダの背中で破損しないための工夫である」など根拠のない理解が広まってしまったことは大きな問題である。

### 調査資料

本研究は伝イラン出土「博物館資料」とメソポタミア「遺跡出土資料」を対比的に検討し、サーサーン・ガ

ラスの生産と流通の実態にせまることを目的とする。「博物館資料」は、岡山市立オリエント美術館所蔵品を基準とし大原美術館所蔵品を資料化した。岡山市立オリエント美術館所蔵品の根幹をなす旧安原コレクションは1968年から1972年までの4年半ほどの間に東京大学の江上波夫、深井晋司、増田精一らの考古学／美術史研究者とともに現地で入手した資料である<sup>1)</sup>。大原美術館は20世紀初頭に蒐集された西洋絵画やエジプト考古美術／イスラーム陶器の蒐集で知られるが、2代理事長大原總一郎は1959～65年に組織された京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊を支援、考古学者水野清一らがテヘラン（イラン）で蒐集した資料をコレクションに加えた。これらは古物市場を介した「博物館資料」のなかでは科学的視点を持った研究者が現地で蒐集に関与した点で、資料性が高い。

対比する「遺跡出土資料」として、大英博物館所蔵品の調査を行った。大英博物館にはニネヴェやニムルド、ウルクといった巨大遺跡のサーサーン朝文化層から出土した300点近いガラス製品が所蔵されている。いずれも19世紀中の発掘品であり、出土遺跡以外の情報は失われているものの、約100点を資料化できた。

### 結果

大原美術館には水野清一蒐集によるガラス製品が35点所蔵されている。このうち、3～7世紀に年代づけられるガラスは15点（サーサーン・ガラス6点、地中海系ガラス9点）、10世紀以降のイスラーム・ガラスは20点であった。前者はカスピ海南西岸の古墓に由来するもので、蒐集時期を考慮すると1958年末から横行し始めた盗掘のごく初期に蒐集された資料である。後者は20世紀前半から古物が流出していたイラン北東部マーザンダラン地方やホラサーン地方に由来するものと考えられる。イスラーム以前のガラスは碗や坏4点（サーサーン・ガラス3点）、長頸や短頸の壺が11点（サーサー

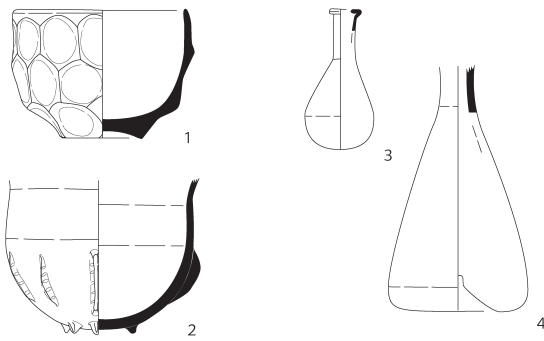


図1 伝イラン出土博物館資料（大原美術館蔵）(S=1/2)

ン・ガラス3点)である。碗形容器には円形切子碗が2点含まれる。古物商石黒孝次郎は1959年夏に伝ギーラーン州出土の円形切子碗2点をテヘランで入手し、1点を水野清一に譲ったという記録を残していることから<sup>2)</sup>、図1-1がそれにあたる可能性が高い。リブ装飾碗(図1-2)はハッサニ・マハレ出土突起装飾碗と同工の碗である。壺形容器のうち、器壁の厚いもの(図1-4)などがサーサーン・ガラスと判断されるが、大半は地中海方面からの搬入品と考えられる(図1-3)。

大英博物館所蔵品はオリエント考古学黎明期の発掘品であり、発掘法や資料の取り上げなどの点で情報の限界が大きいため、一括してメソポタミアのサーサーン朝都市遺跡の様相としてとらえる。これらの数量的主体をなすのは丸底の小壺や長頸の瓶などの小型製品である(図2-1~7)。ほとんどが素文であるが、型吹き(図2-8~10)やカット(図2-11)などの装飾もみられる。把手付壺(図2-12、ニムルド出土)は淡黄褐色透明ガラスを宙吹きしたもので、地中海方面からの搬入品と考えられる。また、伝イラン出土資料では稀な器種としてゴブレット(図2-13、14)、把手付水注(図2-16、17)、円錐形容器(図2-15)がある。これらは地中海系ガラスの類品に比して、器壁が厚い傾向がある。碗形容器は型吹き(図2-19)やカット(図2-20、21)など装飾に富む。切子円筒容器(図2-18)は用途不明で、古墓由来とされる伝イラン出土博物館資料にはあまり見られないがニネヴェやニムルドなど都市遺跡では複数の類例が知られている。資料数の多寡は遺跡の性格と関係があるのかもしれない。

## 考 察

本研究の結果、古墓由来の伝イラン出土博物館資料には地中海系ガラスが含まれること、メソポタミア都市遺跡出土資料には瓶や壺といった小型貯蔵容器のほか、

碗や鉢、ゴブレット、把手付水注に加え地中海系ガラスが含まれることを確認できた。両者を比較すると伝イラン出土博物館資料は飲用器や小型貯蔵容器といった特定の器種に集中していることが明らかである。こうした傾向は、その故地とされるカスピ海南西岸地方の消費のあり方、つまり葬送儀礼の特性を反映していると考えられる。また、両者にみられる壺形容器を比較すると、伝イラン出土博物館資料では地中海方面からの搬入品と考えられる壺が複数見られるのに対し、メソポタミア遺跡出土資料に地中海系小型壺は稀なことをふまえると、メソポタミアを経由しない流入経路を想定する必要があると考える。

3世紀後半以降、ユーフラテス川以東で吹きガラス生産が拡大した。大英博物館所蔵資料からは日用品と見られる小型素文の瓶／壺から、カットや型吹きなど装飾性の高い碗形／鉢形容器まで幅広い器種が生産されたことが明らかである。サーサーン朝時代のメソポタミアやイランへ地中海方面からガラス容器が流入していたことは明らかであるが(図1-3、図2-12)、反対にユーフラテス川以西ではサーサーン・ガラスの出土報告は知られていない。ユーフラテス川の支流、ハブール川流域に所在するテル＝アルバンはサーサーン・ガラスが確認できる最も西の遺跡である(図2-21)。はるばる日本にまで運ばれたサーサーン・ガラスはどのように西方に拡散しなかったのだろうか。以下に、実用品と高級品にわけてその理由を考察する。

図3はメソポタミア出土の地中海系ガラスである。把手の大きさから用途を推測すると、大型の貯蔵容器であり、ワインやオリーブオイルなどの貯蔵容器として用いられていたと考えられる。考えてみれば、新アッシリアの文献にはワインは地中海沿岸地域から貢納品として列挙されており、地中海方面からのガラス製貯蔵容器の流入の背景に食用油／香油を含めた内容物と深い関係がある可能性がある。だとすれば、カスピ海南西岸由来とされる博物館資料に地中海系ガラス小瓶が含まれる一方、サーサーン系ガラス小瓶が少ない事実とも符合する。

一方、カットや型吹きなど装飾性の高いガラス容器は奢侈品であり、消費者の美意識や好みが反映される。石製品を好むメソポタミア／イランの人々の好みが反映されたサーサーン・ガラスの高級器種は厚手の器壁に立体的なカット装飾を施されているが、伝統的に多彩な色彩や人物や動植物など具象文が施されたガラス容器を好んだ地中海周辺地域の人々の美意識と相容れなかったの

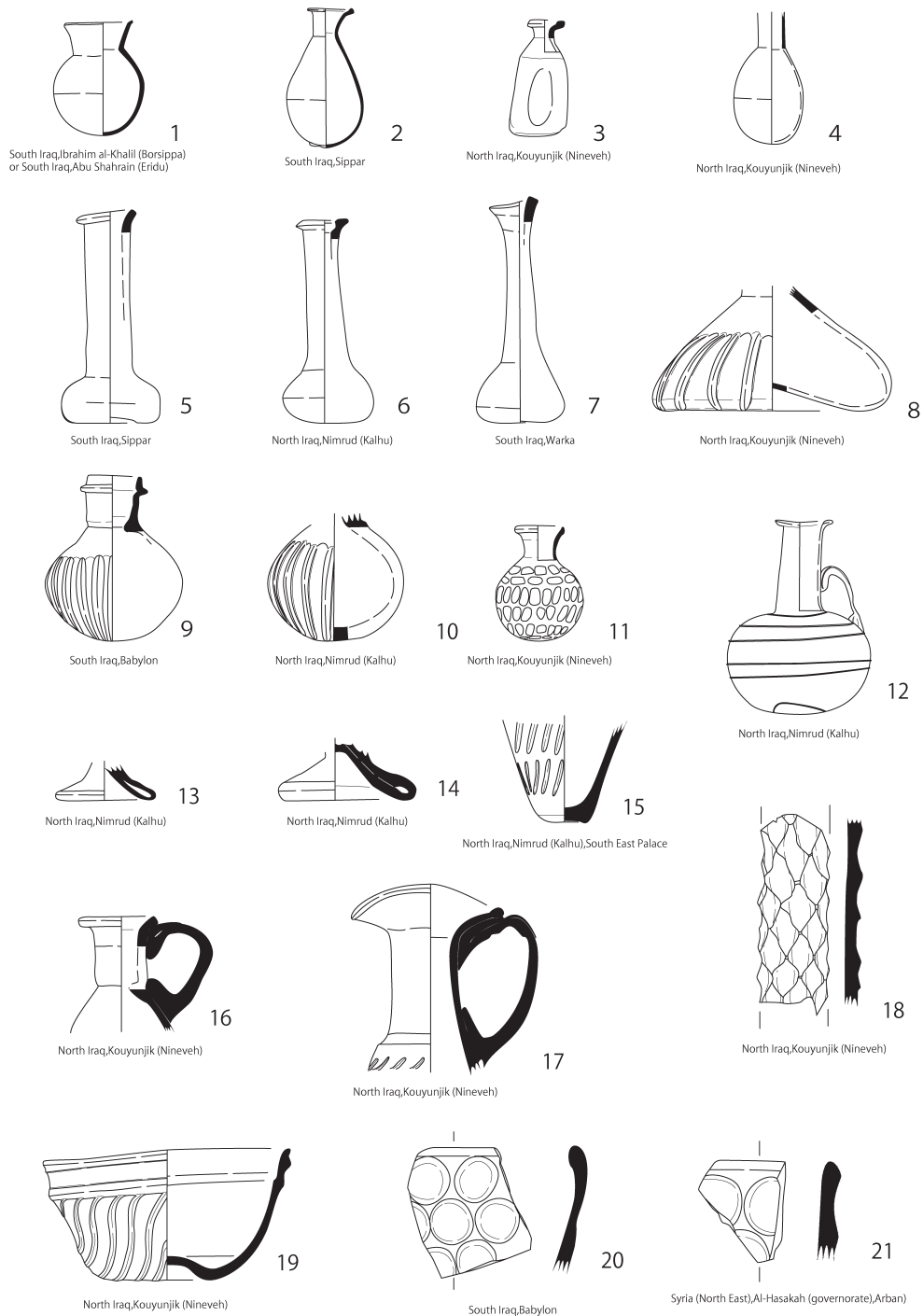


図2 メソポタミア出土ガラス (大英博物館所蔵) (S=1/2)

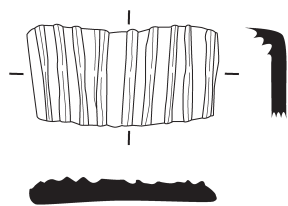


図3 メソポタミア出土地中海系ガラス (大英博物館蔵) (S=1/2)

ではないか。

### 要約と展望

サーサーン・ガラス研究における混乱は伝イラン出土資料とメソポタミア出土資料の齟齬にあった。本研究により、博物館資料の故地とされるカスピ海南西岸は消費地に過ぎず、器種組成の偏りは遺跡性格に起因する

資料の特殊性に負うところが大きいことを確認した。メソポタミア地域は素文の日用品から装飾性の高い高級品まで幅広い器種組成が確認できることからサーサーン・ガラスの製作地と考えたが、地中海方面からのガラス容器も少なからず流入していたことも明らかとなった。その原因として、メソポタミア出土の大型貯蔵容器片を手がかりに、地中海方面から運ばれた内容物との関連を想定した。今後、調査を継続することで本仮説の妥当性を検証していきたい。

さらに、装飾性の高い高級品のサーサーン・ガラスがユーフラテス川以東での出土例が見られない理由は今のところ、美意識の違いにもとめたことも今後の検討課題としたい。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、公益財団法人大原美術館館長高階秀爾氏および理事長大原謙一郎氏、大英博物館西アジア研究部イランアラビア部門キュレーターのセント・ジョン・シンプソン氏には貴重な収蔵品の調査の快諾と多大なご協力を頂きました。東京理科大学中井泉教授および阿部善也助教には分析化学からの多数の助言をいただきました。最後に、ご支援いただいた公益財団法人三島海雲記念財団には学術奨励金を助成していただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 四角隆二：岡山市立オリエント美術館研究紀要，22, 56-70, 2008.
- 2) 石黒孝次郎：古く美しきもの1, p.158, 求龍堂, 1976.